

戀の詰壇

高田 阿刀



戀の詰壇

高田 阿刀



壇話の恋

初出誌一覽／壇話の恋（原題黒の匂い） オール読物 昭和55年12月号／姉妹抄 小説現代 昭和55年11月号／追われる男 小説新潮 昭和55年2月号／冷たい関係 週刊小説 昭和55年10月31日号／長距離ランナー 別冊文芸春秋 昭和55年秋季号／夫婦の休日 オール読物 昭和55年6月号／セールスマン講座 問題小説 昭和55年10月号／夢の街 小説推理 昭和55年2月号／灰色の声 別冊小説宝石 昭和55年爽秋号／賢者の贈り物 小説現代 昭和55年8月号／魔除け 小説現代 昭和55年5月号

一九八〇年二月一九日 第一刷発行

著者—阿刀田高（あとうだ・たかし）

発行者—野間省一

発行所—株式会社講談社

東京都文京区音羽二—二—二二 郵便番号 一一二 電話 東京〇三（九四五）一一一一 大代表 振替 東京八一三九三〇

印刷所—豊国印刷株式会社／千代田オフセット株式会社

製本所—株式会社大進堂

定価—九八〇円 落丁本・乱丁本はお取り替えます。

© Takashi Atoda 1980 Printed in Japan

0093-307323-2253 (0) (文2)

目次

爆詰の恋	4
姉妹抄	28
追われる男	56
冷たい関係	78
長距離ランナー	100
夫婦の休日	124
セールスマン講座	150
夢の街	170
灰色の声	186
賢者の贈り物	216
魔除け	242
著者自身から	270

裝
幀
和
田
誠

壇話の恋

「『ノワール・ノワール』はありませんか」

「なんででしょう」

「香水です」

「国産品ですか」

「いえ、フランス製です。日本語に訳せば、なんて言うのかな、ノワールが黒だから……」

「聞きませんねえ」

私はひところ思いつく限りの香水売場を訪ねて「ノワール・ノワール」を捜し求めたものだった。デパートへも、ホテルの売店へも、アーケード街の小さな香水店へも。

だが、求める品はいっこうに見つからない。名前を知る人も少なかった。「ノワール・ノワール」はそれほどめずらしい香水なのだろうか。

だが、私の机の小引出しには、三角の黒い小壘こびんが一つしまっている。ラベルは金文字でNOIR・NOIR。ここ三年ばかりのあいだに、壘の中の液体はめっきり量が少なくなった。あと半年持つかどうか……。

——大切にしないではいけない——

そう思うのだが、夜の闇に包まれると、この匂いを嗅がずにはいられない。黒い視界を透かして夕海子のイメージを求めずにはいられない。

部屋をまっ暗にして壘の蓋たを取る。と、かすかな匂いが漂う。
なにかの花の匂い。

だが、なんの花か、私にはわからない。業者たちが「花東^{フイダ}」と呼んでいる香水のように、複数の花の香りを集めたものなのかもしれない。

闇を縫うようにして香気がたゆたい、その広がりの中から忽然と恋の夜のくさぐさが甦^{よみがえ}って来る。夕海子のイメージが、さながら黒い波のようにひたひたと私の心に戻って来る。

香水は無明の世界にこそふさわしい。「ノワール・ノワール」と名づけられたのもそのせいだろう。私は黒の色をさらに色濃くするために眼を閉じる。時が流れ、時が止まり、追憶が私の存在感さえも犯してとめどなく飛翔する。

——もう壘の蓋を閉じなくてはい——

焦燥感が意地悪く首を持ちあげ、私の思考を目茶苦茶にする。

——さあ、あとは明日の夜にしよう——

香気はふっと途切れ、灯りがともり、目の前に黄ばんだ現実が広がる。夕海子はもういない。それにしても嗅覚というのは不思議な感覚だ。把えどころのない、不確かな感覚のくせに、脳味噌のどこかの部分に直接届いて記憶の網の目を一つ一つ鮮明に浮かびあがらせてくれる。

いや、記憶と呼ぶのさえ不適当だ。過去の切り口がそのままそこに実在するのだ。

幼い頃に馴染^{なじ}んだケーキの香りが、ブルーストにあの尨大な「失われた時を求めて」を書かせたのは、おそらく記憶の糸をたぐったからではあるまい。脳の中には跡かたもなく消えている過去が、遠い日の匂いを手がかりにして、突然目の前に実在し始めたのだ。さもなければ、どうしてヴェルデュラン家が集まる人々の細かい仕ぐさまでもが、あれほど克明に描けるものか。彼は思い出したのではなかった。閉じた暗い険の底に、失われた時代の人々が本当に生きて、蠢^{うごめ}いていたのだ。パーティのさんざめきも、灰色を帯びたパリの家並みもそこにあったのだ。

「ノワール・ノワール」の香りに乗って闇の中に甦って来るものは、到底文豪の世界に及ぶほど大きな現実ではなかったが、かけがえのない私の過去が一齣一齣生きて躍動することには変わりがなかった。

——こんなこと、どうして今になって思い出すのだろう——

これまでにただの一度も思い出したことのない、新しい情景が脳裏に映し出される。

闇の中でただ一揺れの香りを嗅ぐだけで、私は夕海子と過ごした時間を繰り返し、繰り返し、また新たなものとして生きることができる。そのめぐりあいが、なにも増して甘味なものであることを思えば、私は、壘の中の水滴が残り少なくなっているのを充分に知りながら、蓋を取らずにはいられない。

——この香水が飛び散ってしまったら、なにかもおしまいになってしまふのだろうか——
ものぐさな私があちこちと香水売り場を捜ね歩く理由もそこにあった。

夕海子と会ったのは、鳥取のあの広大な砂丘の果てだった。

私はサラリーマンになって二年目。年度末に余った休暇を消化するために旅に出た。気ままな一人旅であった。

学生時代には金銭の面であまり余裕がなかったので、旅行を楽しむ機会も少なかった。おかげで日本の各地に行ったことのない名勝地がたくさんある。一都二府一道四十三県の中で、一度も足を踏み入れたことのない地域がいくつも残っている。

一人前の男としてはいささか恥ずかしい。

地図を塗りつぶすように、意識的に見知らぬ土地を歩いてみたのである。
砂丘に着いたのは午後の四時頃だったろうか。

午前中に雨が降り、観光客の数は思いのほか少なかった。

——いつもこんなものかな——

訝しく思いながらリフトに乗って砂丘の見えるところまで来ると、目の前に突如雄大な風景が広がった。足下に褶曲の多い砂の凹地が続き、その向こうに砂山が壁となつてそそり立っている。しかもその壁は視界の及ぶ限りどこまでも遠く、高く続いている。砂丘を登り降りする人の姿が遠景の中でもどかしく蠢いていた。

なんの愛想もない、殺風景な展望であつたが、なにはともあれその根太い、荒涼たる自然のたずまいに胸を打たれずにはいられなかつた。

——本当に日本の中の風景なのだろうか——

そんな感慨さえ心に昇つて来る。

私も靴を脱ぎ、傲然と連なる灰白色の山稜を目ざして一步一步砂を踏んだ。

砂山のとっぺんに立つと、その先はまた急な斜面となり、裾野のほうでゆるやかに崩れてそのまま海に続いている。今度は日本海の青の色が濃淡のうねりを映しながら一望の中にあつた。

子どもたちが砂丘を昇ったり下ったり、あるいは転げたりして遊んでいる。自然はそんな戯れになんの感傷もなく、ただ無表情に広がっている。

「絶景だな。一見の価値はある」

私は海と砂とを眺めながら十数分も佇んでいただけだろうか。

視線を砂丘の果てに移すと、たった一つだけ小さく動いているものがある。

——あんなところにも人がいる——

ほとんどの観光客たちは、リフトの終点からまっすぐに砂丘に届くあたりに点在していて、それ以上遠くにまで足を運ぶ者はいない。

あまりにも風景が大き過ぎて——言い換えれば、どこまで行ってみても同じ砂山の中なのだし、遠くまで行つては帰路が厄介だ——そんな考えが無意識のうちにも宿るものらしく、人間の群がる領域にはおのずと限界があった。

遠い人影はその限界をはるかに越えて、孤独な散策を楽しんでいるように見えた。

私もまた同じような試みに心を誘われた。

どのみち先を急ぐ旅ではない。まさかこの年齢で帰り道がつかなくなることもあるまい。足を運ぶにつれ、遠い人の輪郭が少しずつ明晰になる。女であることがわかった。

——なにをしているのかな——

素朴な興味が足の運びを速くした。

近づいてみると、女はなにか格別なことを企てているわけではなかった。

ただぼんやりと海を見つめ、それに飽きると波の端をよけながら波紋の跡をたどっているふうである。

「静かですね」

声を掛けたのは、女のうしろ姿がなにより美しく、なにやら寂しげに見えたからだったろう。声は海風に飛ばされて、しつかりとは届かなかつたらしい。

女は振り向き、身振りで問い返した。長い髪が頬に流れ、白い、若やいだ表情が揺れた。

「きれいですね、海が」

私が月並みな言葉をかけると、女は包むように頷いてから、

「ええ」

と、答えた。そして、

「あのあたりが」

と、指を差した。

潮の流れでもあるのだろうか、一きわ色鮮やかな群青の帯が夕映えの輝きを飲んで蛇行して
る。

女は少なくとも極度に人見知りをする質ではないらしい。私の存在を表情の半分で意識しながら海を見つめている。

二十五歳より上、三十歳より下、私はとりとめもなくそんなことを思った。その推定にさほどの自信があったわけではないけれど。

ちょっと反り加減の鼻は、微妙なところで穏やかな美しさを保っている。頬の白さも表皮の一重下にほのかな紅の色を含むようで、群生する桜花の色を思わせた。

「お一人ですか」

そう問いかけて、見れば一目でわかること、馬鹿な質問をしたものだと思われるが、狼狽していると、女はこちらのそうした感情をたくみに掬いあげ、

「一人旅なんです」

と、言う。

「私もそうなんです」

「厭あね。やっぱり寂しくなってしまう時があつて」

「そうですか」

「ええ」

女の顔が正面を向いた。

目差しがもの問いたげに私の目を見つめている。

私は困惑した。

なにをどう話しかけてよいかわからない。

それにも増して女の端整な面差おもてざらしが、私の気持ちを戸惑わせる。

女の美しさを表現するときによく女優のだれかに似ているといったふうな言い方をするが、目の前の女はそうした連想を拒絶していた。鼻の稜線も、頤おとがけの脹はくらみも、むしろ鋭角的で、エキゾティックな曲線でさえあるのだが、さりとして全体の印象はけっして洋風なものではなく、眼もとの涼しさも、唇のやわらかさも、これはもう明らかに穏和な大和撫子なごしこの特徴であり、よく見ればアンバランスにもなりかねない個々の造作が、際どいところで典雅な調和を保っている。

——この人に姉妹がいたら、それほどきれいではないかもしれない——
などと、そんな想像を抱かせる微妙な美しさであった。

「ご姉妹きょうまいがおりですか」

「どうして？」

「ただなんとなく」

「いないわ」

「きつとみなさん美人だと思って」

「ああ？」

女は「ア」音を発音したままの口の開き加減で私をまじまじと見据えた。

「うまいのね」

そう言うってから波打ち際をゆっくりと歩き始めた。ふくらはぎの白さが目に染しみる。

その場の成行きで私は女のあとを追った。砂地にえぐられた足跡を一つ一つ踏むようにして。女は知らない歌の一節を口ずさんでいる。

太陽は少しずつ海面に近づいて一刻ごとに海の色調を変えた。

「あとのくらいで日没かな」

「音がするわよ。ジュジュって」

「なるほど」

いつしか二人のあいだに懇しい気配きふが流れていた。少なくとも私にはそう感じられた。なぜだろう。

奇妙と言えば奇妙だった。男と女はこれほど簡単に親しくなってしまうっていいものなのだろうか。女は見ず知らずの男に対してもっと警戒心を抱いてよいのではないか。

だが、理由の詮索はさして意味がない。

おそらく女のほうになにか格別な、心の赴く理由があったのだろう。

それとも春の日の悪戯だったのか。砂と海と夕映えと、荒っ削りな自然の風貌が、ちまちました人間たちの思惑を取るにも足りないものに感じさせていたのは本当だ。

小賢しい理屈を言うならば、太古、男と女は一目で愛しい、一日のうちに肌を重ねることができたのではなかったか。砂丘の風景は、その遠い昔の風色をそのまま残しているようにさえ思えた。

「不思議だなあ」

「えっ？」

「前から知っている人みたいな気がする」

「そうかもしれないわ」

女はスキップを踏むようにして駆け出した。

私も駆け足で追ひ、肩に手を触れた。女はことさらに抗あらがおうとはしない。

「海の向こうにはなにがあるの」

「海の向こう？　また海がある」

「その向こうは？」

「やっぱり海だ」

「海ばっかり？」

「たまには陸がある」

「どこまで行ったら太陽に追いつくの？」

「漕いで、漕いで、漕いで……でも、今日は舟がないから駄目だなあ」

女が振り返った。

名前を尋ねたのは、その時だったろうか。

「ユミユって言うの。夕辺の海と書いて」

「すばらしい」

夕海子はその名の通り、夕辺の海を背に負うて白く、燦然と光っていた。

市内の宿に入ったのは十時過ぎだった。

いつまでも別れがたく、散策を続けながらとりとめのない会話を交わしていた。

「宿は？」

と、聞けば、

「当てがないの」

と、言う。

「じゃあ、私の宿へ行きませんか」

身を堅くして誘いかけると、夕海子にはすかいに視線を伸ばしながら、

「ええ」

と、吐く息の響きで頷いた。

旅館の主人は、一人客の予約が二人に増えているのを見てもさほど意外に思ったふうはなかった。よくあることなのだろう。

「どうぞこちらへ」

「ありがとうございます」

「食事はどうなさいます」

「もうすんだ」

「じゃあお布団をとらせていただきます。お風呂はこちらですけど……一階に大きな岩風呂がございますわ」

「ああ、そう」

私は岩風呂のほうへ行くことにした。

夕海子と一つ部屋にすわっていると息が詰まりそうで、少時気持ちを取りなおすためにも部屋を出る必要があった。

「じゃあ私は岩風呂のほうへ行きますから」

「はい」

夕海子は子どもがするように胸のあたりで小さく掌を振り、別れの合図を作った。

風呂から帰って来ると、紺色と朱色の布団が二つ並べて敷いてあった。

夕海子もちょうど部屋つきの風呂から出たところらしく、すでに夜着に着替えてペランダの籐椅子に腰掛けていた。庭の灯に映る淡い緑の樹木に見入りながら、ことさらに部屋の中の様子を——二つの布団の存在を見ぬようにして。

「空にあんなにたくさん穴があいているわ」

首を伸ばすと、本当に穴を穿うがったような鮮明な星空だった。

私も向かい合って籐椅子にすわったが、うまい話題が浮かばない。夕海子は知らない男と一宿に泊まることなど、まるで頓着せぬように頰杖をつき夜空を見つめている。

夜は刻一刻と更けて、就寝の時間が近づいた。

「休みましようか」

「ええ」

私が立ち、夕海子が続いた。

「おやすみなさい」

「おやすみなさい」

声を掛けあって布団の中に滑り込み、部屋の中がまっ暗になった。

私は寝つかれない。

夕海子が眠ったのかどうかわからない。身動きひとつしない。

あまりにも動かないのは、かえって起きているせいなのかもしれない。

「夕海子さん」

小さく呼んだが返事はない。

それもまた目醒めている合図のように思えた。

逡巡の時は流れ、私はそっと手を伸ばして隣の布団の中をさぐった。

夕海子の手は思いのほか近くに——布団の端のあたりに垂れていて、そのことが私を勇気づけた。

手首は眠りの中にあるように動かない。